

## 「多摩川水系河川整備計画【大臣管理区間編】(変更原案)」に対する公聴会

日 時：令和7年8月4日（月）11：00～11：20

場 所：大師河原干潟館

発言者：公述人1

皆さんこんにちは。わざわざおいでいただき、誠にありがとうございます。暑いですね。今日、またものすごく暑いというのを毎日毎日繰り返していて、今年記録、真夏日の記録ってとか言つていて、だんだん39から40度になって、あと2、3年たつたらどうなのでしょうね。40度を超えるのが普通になってくるのかなんて、気温は変わっても、私たち人間の作りは変わらないので、私たちはどうやって生きていったらいいのだろうなって、そういうことを考えなくてはいけないのかなんて危機感を持ちつつも、じゃあ一体何をすればいいんだろう、これが皆さん、私も含めての大半の人の気持ちではないかなと思います。

今いろいろ説明をいただきて、治水と利水にプラス環境という項目が入ったよ、これを法的にもきちんと守っていかなければということになってね、そういったところの目標はできるのですけれども、じゃあ一人一人私たちが一体何をやつたらいいのだろう。これは私も分かりませんし、おそらく河川管理者の皆さんであっても、市民の我々であっても、行政であっても、企業であってもなんとなくはわかるのだけれども、じゃあ具体的に何をするのだろうっていうところがなかなか見えない。なかなか見えない、何をやつたらいいのだろうという中で、どんどん気温が上昇していくというのが、今の私たちが生きているこの世界かな、なんていう風に思います。

それでは早速ですけれども、いろんなお話をさせていただきたいかなと思います。まず、何枚か私の方の資料という形でね、本当はパワポの方で作りたかったのですけれども、申し訳ないです。配らせていただきました。大きな台風が来た時に、地元のすぐそこにある東門前小学校っていう学校があるのでけれども、その4年生の先生に、毎年防災だとかそういったテーマでね、子どもたちに話してくださいということで、京浜さんからもね、林さんとかかな、お呼びしてお話を聞かせてもらった。あと私たちの中で、じゃあ災害どうしようってことをやらせていただくときに先生が台風19号のことを話してくれって、今の4年生、結構台風19号を忘れてしまっているのだよねって言っているのですよ。確かにもうコロナ前ですからね。4年も5年も経っていると、1年生頃、記憶がなんとかあるのが1年生ぐらいなので、19号のことももう忘れてしまっているのですね。なので1枚ペラを作らせていただきました。これは私がとった写真ですけどもね、御覧の通りでございます。1番下の写真、これ六郷橋ですね。本当に橋脚パンパンになって、なんか水が盛り上がっている状況。これは私が撮ったのではありません、これはお友達が、六郷橋のところの某マンションに住んでいて、写真を私に送ってくれました。もう■■さん、こんな状況だよ、あと1m、2mどころじゃないよ。船着き場がありますよね、あれが階段1段レベルだった。ということは30cmとか40cmですよね。そんな状況だったよということで写真を送ってくれたのを活用させていただきました。

あと台風後ですね、いろんなものが流れてきて、面白かったのは川崎市でいろんなパークゴルフ場とかあるのですけれども、そこの管理棟が流れてきました。あとお便所ですね。もう流れてくるもののレベルのゴミが家1軒分、まさに狛江の台風を彷彿させるような状況でしたね。ただ、

狛江台風の時、死者は出ませんでした。今回の19号では川崎市一人の方が死んだという、まさに衝撃的な事実がありましたね。なので、これはちゃんと記録に残さなきゃということでこんなペラを作つて災害の自然と共に合わせて災害のことも伝えていきたいなと思います。

あとここにもう1枚ありますのは、多摩川河口の汽水域 干潟で暮らす生き物たちというのがあります。これもご覧になっていただければと思いますけれども、干潟のお話を書いています。干潟の写真もあります。干潟ってこんなところだよ、こんな生き物がいるよ、なんてことが書いてあります。あとタイムズなんて、これはまあ、見てくださいってことなのですが。ちょっと宣伝ばかりしてね、お話させていただきます。

私たちの限られた時間の中で何を申し上げたいかなと言うときに、まず限定しようと思いまして、まず真ん前ですね、六郷の干潟、あと大師河原の干潟、ここの干潟の形がどんなんになるのかな、なんていうのを地元に住んでいて、ここで活動している人間としてすごく興味があるし、ここ干潟館、いろんな人が訪れるときに、どうしても多摩川のことを私たちにいろいろ聞いてくるのですね。それこそ波消しブロックを作つていると、あれなにやつてあるのですか、とか、あとあそこが原っぱになつたところが下に鉄板を敷いてまさに工事現場みたいになつたときは、あれ何ですか、原っぱだったのにどうしちゃつたのですか、みたいなことも私たち聞かれるのですね。その時に正確なことを伝えなきやいけない、ということで資料を置かせていただいて、今回これの件についてですけれども、これはあつという間になくなりました。ちょっと話しかけるとね、じゃあ下さい、ありますということで、持つていかれました。なかなかこういった会だと人が集まらないから、みんな関心ないのかな、なんて思うのですけれども、やっぱり内容は広く伝わつているとね、きっともっと来るのかなとか、あとこういった会じゃなくても、ああやってチラシを置くだけでも、たくさん置くだけでも紙媒体でもいろんな人がね、興味があるんだなと。多摩川にお散歩している人これだけたくさんいる中でね、たくさんの人人がやっぱり自分たちの川ですから、特に大人は19号のこととかしっかり覚えていきますのでね、それを子どもたちにどう伝えるべきかという意識のある方もたくさんいらっしゃるのかなと思います。

今、これから定量目標の話を聞かせていただきましたが、1つご提案したいのは、やっぱり昔の人の治水の知恵、それをもしかしたら活かせるのではないかなど。昔の通りじゃだめですよ。でも昔の人のまさに自然が自分たちの生と死の隣と隣り合わせでいた時っていうのは、かなり緊迫していたのではないかなと思います。これ子どもたちが作った模型なのですけれども、これはなになに？これを置いておくと何ですか？とたくさん聞かれます。皆さんはご存じだと思いますけれども、うちのスタッフ、わかってくれなきや困るのだけどなんですか？これ聖牛ってやつですね。水制をここで説明してもしょうがないかなって感じなのですけれども、岸による水勢を衰えさせるというためのものなのですけれども、昔は木だったのですけれども今はコンクリートですよね。私の記憶では私が小さいときに二子玉川にありました、聖牛が。水がこっちからくるからこういう形なのですよね。これはたぶん子どもたちが資料を見て作ったのですけれども、私が知っている聖牛は先がとんがつていなくて、こういった真四角を積んだ形の聖牛が二子玉川に当時の子どものころ何もわからなかつたので、その周りにはエビや魚がたくさんいたのですよ。ということは昔の人はやっぱり、これは昔からありますよね？信玄堤とか蛇籠とかね、そういう形で自然から自分たちを守つたのですけれども。昔って私思うのですけれども川って怖いものと同時に恵みを与えるものだったと思うのですよ。そうすると護岸をやつたときにそこに

生き物がいなくなっちゃう、自分たち困ったのでしょうか。水害がないときっていうのはたぶん漁をしてエビや魚を捕っていたと思うのですよ。そうすると私、子どもの体験で聖牛のまわりに行くとエビや魚が捕れたよってことで、きっとそれをいざとなったら防災で活用なのですが、もしかしたら普段は利用、活用、要するに生き物がたくさん捕れるとか、草花ができるとかそういうことに変えていたのではないかな。自然って怖いよ、だけど恵みはあるんだよなんて私たち子どもに伝えますけれども、もしかしたら昔の人は「そんなの最初から知っているよ」そういうことだったのかなと思います。これは私の体験から一つの意見ですけれども、そういったところで築堤という話になっていったときに、このページにある一緒に多摩川を考えてみませんかのこのページのところにある高水護岸を整備するよといったとき、もしかしたらコンクリートだけで固めるよりも何かもう一つ知恵がここにあるのかな、なんてことを思いました。水衝部の対策ということで、増えたときに勢いよくぶつかる場所を頑丈にしますとありますけれども、もしかしたら頑丈にするだけではない、別の知恵もあるのではないか、なんて思います。ぜひぜひ、皆さんによろしくお願ひしますではなくて、京浜さん専門家なのだからここでお願ひしますじゃなくて、ここで一緒に知恵を合わせて考えるのが我々市民の役目だと思います。特に水辺の楽校というシステムを私たちに与えてくれたというか、そういう機会を得ることができて皆さんと一緒にこうやって活動して、子どもたちだけじゃないですね、子ども達っていうけど大人も来るのですよ、だからちょっと変な話、選挙権のある大人も一緒に来るわけですよ、水辺の楽校って。だからこういったことで人々を水辺に導く活動をしていく中で、もしかしたら政策なんかにつながっていくのではないかと思います。子どもたちは将来の政策につながるって考えますけれども、大人たちにしてみるともう近々でこれはつながっていくのではないかなど、そんな効果もあるのではないかなんて考えて日々水辺の楽校をやっています。

そうですね、ちょっと具体的なことをいうと、私六郷橋から土手沿いにここに来るのでですよ。そうすると中瀬サッカー場の前に大きな竹林が 2 カ所あるのですよね。ご存じの方いらっしゃると思うのですけど、ものすごい規模の竹林です。どこかの公園的規模ではなくて、広さでいいたら、そうだな 300 坪、500 坪、1000 坪近くあるかな。2 つ合わせると 1000 坪くらいあるのじゃないかなと思うのですよね。あそこの竹林ってね、結局私の見ただけですよ、経験からですけれど、台風 19 号の時、あそこって崩れてないのですよ。あれもしかしたら竹藪のせい、なんで竹藪をね、行政なんかが片づけないかな、伐採しないかなっていうとホームレスの方が住んでいらっしゃるのですよ、何人か。なんでそう簡単に人権って問題もあるので、そう簡単にザーッと大型耕作機でできないのですよね。そういうところって実はこの辺あったりして、そうするともしかしたら、もしかしたらですよ、この竹藪があったので中瀬サッカー場、護岸が削れてないのですね。だからこうやって今申し上げたいのは自然をなんだか年がら年中見ているとか、気にしている人たちを増やすということは、いろんな知恵が沸いてくるのではないか、その知恵を皆さんに伝える場ですので、提案としてなんですが、学識の先生方、非常に重要なこと、大事なこと、私なんかが知らないことたくさん知っていらっしゃるかと思うのですが、それとはまたもう一つ地域の、私たちの水辺の楽校もそうですけれども、地域もですよね、それと管理者の方たちと自治体の方たちとの話し合いの場っていうのを、あの流域懇談会とか私も委員ですし、参画していますがもっとピンポイントな感じでね、そういった場があったら、羽田さんなんかやっていますよね、協議会なんていってね、大田区さんと京浜さんと羽田さんとやっていたりするのですけれど

も、じやあ声に出せばきっとやっていただけるはずなのですから、なかなか日々忙しくてなかなかできないっていう状況なのですが、そういった場があったら、ここだけじゃなくて中流部、上流部でもいろんな知恵が集まるのではないか、なんて思います。どうしても作る側がね、京浜さん、国交省さん、私たちがそれに対してこうやるのによってことに対して、「え、これはよくないよ、ああしてよ、こうしてよ」っていうのが構図なんですが、そうではなくて私たちが知恵を出す、お互いに知恵を出す、これがね、やっぱり非常にこれから重要になってくるのではないか、なんてことを思います。

時間もないでかいつまんでお話をさせていただきますが、この写真がね、たまたま、これもそうですよ、鳥の観察にちょいちょい、ちょいちょい通っていた時にこういったとこに出くわしたのですけれども、これはと思って写真撮っちゃおうと思って撮ったのですが、これまでに土にシート貼って、その上に石を並べて、この石をお裁縫で縫うってよく言うのですけれどもワイヤーで通すのですよね。その上に覆土して草を貼る。こんな姿ってたぶん私がたまたま興味ある、自然も興味があって、水防にも関わる人間だから、おっ、これは見ておかなきゃと思ったのですけれども。これは見ておかなきゃという人を沢山増やしていく、そうするとそんな中でいろんな知恵が、これがいいよとか、悪いよとか、こうしたらしいじゃないとか、もっとこうしようよとか、そういう場をこれからどんどんどんどん作っていきたい。その中で水辺の楽校を運営していくって非常に重要なポジションなのですが、ここはちょっと苦言になってしまいますけれども、何しろ運営が厳しいです。いろんな面で、人的面、経済面、いろんな面で水辺の楽校厳しいですね、よく私だけすぎて言っちゃうのですけれども、水辺の楽校はね、どっかにパラサイトしないと生きていけないので、なんて言い方をするのですね。ぶっちゃけ、この水辺の楽校は干潟館、私たち NPO 法人なんでね、川崎市さんから活動費用をいただいてやっているので、なんとか成り立っているのですよね。そうするとだいし水辺の楽校は NPO にパラサイトして成り立っている。そうですよね。

頷いている人がいますが、そんな状況。他の水辺の楽校さんもそんな形をとっているのではないかと思うんですね。そうすると助成金とかっていう形になるのですけれども、やっぱり水辺の楽校なので、なにしろこんなシステムないと思うのですよ。こんな広い流域でね、川の形状、干潟があり、溪流があり、中流がありって中をネットワークしているっていうのは非常に貴重だな、重要なだなと思うので何かそういった形で支援を頂けたら、非常に私たちやりやすいな、もうモチベーションだけでこうやることではないと思うのですね。気候変動であったり、治水、水害対策、それプラス環境、これきっと私、環境と水害対策、治水、利水っていうのは相反するということではなくて、一緒のことだと思うのですよ。ただ、形が違うことでこれは堤防を作るから反対、ダムをつくるから反対、反対、自然保護、自然保護っていう構図ではこの先もたないなと。何度も申し上げておりますけれども、これはもう市民側も行政側も一緒にやっていかないとこの気候変動には対応できない、そういうふうに考えます。

ネイチャー・ポジティブ、これ非常に重要なだと思うのですけれども、これも紙をお配りしたのですけれども、これは昭和 28 年の川崎区の写真です。地べたが何だってたくさんあるのですよね。これ今写真撮ると、これ面積で考えるとコンクリート面がどれだけこの倍あるのって考えるのですよ。ぱーっと高いところから、ここもそうなのですけれども見渡した時に、地面のアスファルトはもちろんのこと、あとはみんなビルばっかりですよね。これ全部コンクリート面なので

すよ。だから、この川崎区が全部土の面積だった面積とビルだと天井を含めると 1、2、3、4、5面ですよね、それを面積計算したら面白いなと思うのですけれど、どれだけコンクリート面が増えたのかな。これじゃあ、ヒートアイランド、ヒートアイランドどころか火がついちゃうのではないか、自然発火でどこか火事ができるのじゃないかなと、そういう街が、時代が来るのではないかなと思っています。これなんか見てください。新町公園っていう公園に大きな大きなため池があったとこなんですね、これ池があったら、けっこう新町公園って広いですよ、3000坪ぐらいあるのではないか、小学校 1 個分ちょっとあるのですよ、なのでそこは丸々池だったのですね。これは今、新町公園、公園になっているのですけどね、でも森ではないのでやっぱり、グラウンドだとか子ども達がサッカー、野球ができるようになってことでね、こういった私たち向き合の方が多摩川グランドもそうですね、やっぱりどうしてもスポーツには勝てないので、まさかここを森にしようっていうたら猛反対を受けるでしょうね。それはしょうがないですね、民主主義なんでね、数の勝ちなので。それを元のネイチャー・ポジティブなんて言ってもなかなか通用しないと思います。なので、なかなか通用しない人たちに対してこういうことなのだよってやるのが環境学習の場、学習とか教育とかいうと敷居が高くなっちゃうので、水辺の楽校の場って考えますので、少しではありますがそうやって子どもたち、以前お話をしたグリーンインフラのテーマになったときにやっぱり子どもたちっていうかね、人の心の中にグリーンインフラを作らないとなかなかソフト面、ハード面両輪ですから、ソフト面、ハード面の政策の理解にもつながっていかないんじゃないかなと考えてやっています。

たぶん喋っていると夕方になりますので、とりあえず私の話はここで終了とさせていただきます。ありがとうございました。